

氏名 よし しば み き 紀 教授



主な研究テーマ

- 1) 海外遠征アスリートの英語学習支援ソフトの開発
- 2) ICTを活用した英語教育

平成30年度の研究内容とその成果

1) は、科学研究費補助金（基盤C）の最終年度でした。以前、本学女子バレー部員を対象に海外遠征時の英語のコミュニケーションに関し実施したアンケート調査の分析を行いました。回答者はバレーの競技歴が10年から14年の経験者ばかりで、海外遠征は一人をのぞき全員が経験していました。遠征先はカナダが多く、他に韓国、タイ、マレーシアでした。遠征先で使用された言語は、英語が一番多く、タイ語、韓国語、日本語の回答もありました。全員が海外遠征時の英語の必要性を認めていますが、競技関連の専門的英語と日常に使う一般的英語や基礎的英語では、「日常使う一般的／基礎的英語が必要」と回答した学生が多数でした。英語が必要な具体的場面としては、まず「他国選手との交流」を全員が挙げ、次に「生活やホームステイ時」を挙げ、「事前準備を含む競技／大会関連」を挙げたのはわずか35%でした。女子バレー部はカナダでバレー教室を開催しましたが、「単語とジェスチャーでコミュニケーションがとれた」との回答もありました。

また平成30年度は、当初予定したバレー、水泳の2つの競技に絞らず、海外で遭遇する場面を2つ（旅行者としての場面と、どんな競技にもほぼ共通するアスリート特有の場面）に分け、教材を作成することとしました。第1部の旅行者としての場面には、入国から宿泊、買物、移動を含め、第2部のアスリート特有の場面に試合の準備・練習、試合、試合の応援、怪我と治療、メディア関連の対応（試合後のインタビュー、試合結果の新聞記事の読解など）を含めることとしました。2年次対象の初級レベルの授業では、市販の教材『やさしい英語で学ぶ“スポーツは世界だ”&英語の基礎』を使って指導しましたが、その教材にスポーツ／競技関連語彙の練習問題や教材になかった武道（剣道）の読み物教材を追加する等試行し、体育／スポーツを専攻する学生のESP教材に対する反応と指導の効果をみました。また以前より収集／購入した国内外のスポーツ・競技関連の教材の内容と構成等も分析しました。

平成30年度の成果は、まず国内と海外で出版された教材の内容を比べると、海

外のテキストは『English for Football』や『Career Paths Sports』など、やはりESP教育を念頭にスポーツの現場での英語のコミュニケーション能力向上を目的に作成されたものが多く、国内のものは『ヨット関連ハンドブック』や『実践テニス英語』等各競技の専門語彙を中心に、競技者が海外の試合等に参加する時参考になる物が多いことが判明しました。

また、これまで3年間の調査や研究結果をもとに、海外遠征するトップアスリート向けの教材の構成と方向性が決まり、出版までは至りませんでした。当初予定した競技別（バレーと水泳）ではなく、様々な競技の選手にも使えるよう、各スポーツ競技で共通する場面を抽出し、前半を旅行者として遭遇する場面別に、後半をアスリート特有の場面別に作成することにしました。海外経験の浅いアスリートは前半から、海外経験豊富なアスリートは主に後半を学習してもらう予定です。

2) については、平成30年度末外国語教育センター1階にあったCALLシステム（パナソニック）を撤去し、学生の持つタブレットを活用しアクティブ・ラーニングが行なえる教室に改修されました。学生側のパソコン、キーボード、ヘッドセットがなくなり、教卓側からパソコン、iPad等を使って情報提供できますが、システムを使った学生同士のペア学習やグループ学習、個別の発音練習やリスニングは出来なくなりました。今後学生のタブレット端末

を活用して、いかに学生をアクティブに学ばせるか研鑽を積んでいきます。

### これからの研究の展望

1) ここ数年本学でスポーツを題材にした教材を使って指導し学生の反応を見ていますが、やはりスポーツ／武道のESP（English for Specific Purposes）教育の可能性は非常に高いと考えます。今後は本学でペーパー版を試用し、選手等からフィードバックをもらって改善し、出版する予定です。平成30年度3月参加したシンガポールの学会では、既に海外の多くの大学でカリキュラムに経済英語、工業英語など専門別にESPの授業があると知り、日本の大学の対応の遅れを実感したところです。

また工学系の英語教材では、学生が将来就職する可能性のある国内の「ものづくり」企業等を題材にした教材が出版され、英語学習を通して学生は日本が世界に誇る「ものづくり」の伝統と高い技術力に思いを馳せています。同じように体育系の学生向けに、東京オリンピックを来年にひかえ、スポーツ関連の企業（例えば、パラリンピックの出場者向けの器具等を開発、販売する企業）等を取材した英語の読み物教材の作成も今後考えていきたいと思えます。

2) 今後は例えば、学生のタブレット端末にヘッドセットを接続して、学生のスピーチの録音や各自の振り返り、そしてプレゼンテーションへ繋いでいけないか考えています。